

5	〔扇子〕 *「松平大和守様江御礼申上候時扇子」の付箋有	明和4 (1767)年	松井家旧蔵文書	P01013	No. 632- 22
---	--------------------------------	----------------	---------	--------	----------------

シンプルな扇子ですが、端に小さな紙が貼られており、そこに「明和四丁亥正月六日、松平大和守様江御礼申上候時扇子」と書かれています。これに基づけば、明和4（1767）年の正月六日に前橋藩主の松平大和守（まつだいら やまどのかみ）へお礼を述べた時、藩主から下賜された扇子であると考えられます。



絵は墨一色ですが、線の太さ・細さを活かして描かれています。正月という時期を考えると、木の花は春の兆しである、ほころんだ白梅（もしくは老樹の白梅か）、背景の半円は日の出、あるいは月と考えられます。梅は昔から夜の香りも愛されてきました。

松井家旧蔵文書には、明和2年の藩主に関する扇子も伝わっています（No. 632-20）。こちら（下部の画像）の絵は、馬と山です。山を白雪の富士山とすれば、馬は古来、名馬とされた甲斐駒かもしれません。

さて、松平大和守家は、寛延2（1749）年に5代朝矩（とものり）が前橋へ入封しましたが、財政が逼迫し、利根川に浸食された前橋城の修理ができなかったため、明和6（1769）年に川越（現・埼玉県）へ居城を移しました（群馬県立歴史博物館『空からグンマを見てみよう一国絵図・城絵図・町村絵図一』）。以後、幕末の慶応3（1867）年まで前橋城は廃城となり、前橋地域は川越藩の分領となりました。

前橋藩主にまつわる扇子が松井家へ伝来した経緯はわかりませんが、前橋町の本陣として直々に頂戴したか、あるいは近代以降に同家が古物商を営んでいた関係で収集されたかの可能性があります。いずれにしても歴史ある城下町ならではの資料といえます。

